市史だより Fukuoka

5

志賀の海人の　一日も落らす
焼く塩の　辛き恋をも　我はするかも

第３回市史講演会のご案内
古代専門部会 紹介
連　載　福岡市史への歩み
コラム　歴史万華鏡
クロスワード
部会だより／おしらせ

鴻臚館跡出土 越州窯系青磁花文碗
（写真提供／文化財整備課）

万葉集巻15-3652番

福岡市博物館 市史編さん室

『資料編 古代』が出来るまで

古代専門部会では資料編と通史編の編集に向け、資料収集を進めています。

現在の福岡地域は古代では筑前国に含まれていました。筑前国が成立するのは七世紀末頃と言われ、これ以前は筑前国・筑後国をあわせた筑紫として把握されていました。このような歴史的な経過を踏まえて古代専門部会では、福岡市域だけでなく、筑前・筑後をあわせた筑紫地域を広く資料収集の対象としています。これにより、通史編をつくる際には、周辺地域との比較も可能となり、福岡市域の古代における特性を、よりはっきりと描く事ができるものと思います。

一口に資料と言っても、その対象は多彩です。まずは文字資料がその中心となります。古文書や典籍に加え、金石文や近年新たな成果をもたらしている木簡・墨書土器などの出土文字資料も収集しています。さらには、古代の土地利用の状況を復原するために有効な古い地理資料（地形図・空中写真・地籍図など）や、ほかの地域との交流を考える上で示唆を与えてくれる仏像などの各種造形品まで、古代の福岡地域を多方面から考えるために、日々調査を積み重ねています。

取り扱う事柄は、奴国に関する記述が残る一世紀から中世との境目となる一二世紀頃までの事ですが、主には古墳時代以降の事が中心になる予定です。

今回は『資料編 古代』が出来あがるまでの長い作業を双六にしてみました。平安時代、白河法皇は自分の思い通りにならない「三不如意」の一つとして双六をあげたとも伝えられます。

もっとも、平安時代の双六は「盤双六」で、この「絵双六」とは異なるものですが（絵双六が盛んにつくられるようになるのは近世以降です）、思い通りの数字が出ないサイコロを使う点は共通しています。一緒に福岡市史をつくっている気分を味わっていただければ幸いです。

ふりだし

1 資料の収集計画を立てる

資料収集の方針を決めます。決定に至るには何度も会議を開きます。収集計画を立てた後も資料の収集状況に応じて何度も検討を重ね、より利用しやすい本づくりを目指します。

2 公刊されている資料から関係する資料を抜き出す

すでに資料集や研究雑誌などで活字化されているものから、関係資料を検出します。もっとも基礎となる作業で、原本調査の下準備ともなります。

15 原稿を作成する

調査や検討結果をもとに、作成した資料目録から原稿を作成します。近年はパソコンを使って、データを作成するのが主流です。同じ文字でも、資料ではさまざまな字体を使うが一般的ですので、どの字体を使うか一つ一つ検討した上で作成します。レイアウトも資料の性格を考慮しながら、できるだけ見やすいように工夫します。

16 入稿する

専門の印刷業者に原稿のデータを渡し、活字を組んでもらいます。

17 校正する

組まれた活字に誤りがないかを確認します。この段階で原稿の内容に変更が加わる事も少なくありません。原稿作成の段階で整えた見やすい記述やレイアウトが崩れないように注意を払います。

18 調査にゆく（5に戻る…）

校正で確認が必要となった資料については随時調査をおこない、できるだけ正確な資料集づくりに努めます。

19 校正する（10に戻る…）

文字の間違いや表記に不統一がないように何度も校正を繰り返します。必要に応じて調査記録や資料の写真などに戻りながら、資料を正確に活字化していきます。

出来あがり

福岡市は大変歴史豊かな街です。その歴史を描くには多くの時間を要します。何卒ご理解とご協力をお願い申し上げます。

古代専門部会刊行予定

資料編 古代1	平成28年度
資料編 古代2	平成31年度
通史編 古代	平成32年度

1 資料編に載せる資料や写真を選ぶ

資料の収集が一通り済むと、本に載せる資料やその写真、図面などを選びます。「資料編 古代」では、出来事を古い順から並べる編年方式を採用する予定ですが、まとめて載せる方が理解がしやすい資料などは、その都度工夫します。

2 地理情報をデータ化する

地理資料や発掘調査で分かった古代の土地利用について、パソコンを使ってデータを整理します。正確な情報処理をおこなった上で、誰もが一目で分かるように、色分けしたり、立体画像を用いるなど見やすさも工夫します。

3 公刊されていない資料から関係する資料を抜き出す

活字化されていない資料から、関係資料を抜き出していきます。研究機関に架蔵されている写真やマイクロフィルムなどを使って調べます。

4 原本の調査をおこなう

資料を実際に見に行きます。文字の確認だけではなく、活字や写真では分からない紙や墨の状態、虫喰いの痕まで丁寧に観察します。これによって伝来に関わる新たな発見がある事も少なくありません。

5 写本の調査をおこなう

資料は伝来の過程で写される事があります。原本が失われていると、写本でしか知る事ができない事実もあります。また原本が現っていても、写された事情などその時々の歴史を窺う資料ともなります。写本が複数あれば、その所蔵者を訪ねて、誤字・脱字・錯簡がないか一文字ずつ比較していきます。

6 目録を作成する

公刊・未公刊資料から検出した関係資料をパソコンでデータベース化し、必要な情報をすばやく検索できるようにします。原本や写本の調査の成果も反映させます。

7 研究会を開く

資料収集の成果を踏まえ、研究会を何度も開きます。毎回さまざまなテーマについて委員が活発に議論し、福岡市史の古代をどのように描くかを具体化させていきます。

8 造形品の調査をおこなう

市域に残されている古代仏・梵鐘などの造形品を、実際に見て細かくその特徴を調べます。写真と調書をとって整理していきます。仏像の胎内からは造立や修理に関する銘文が見つかる事もあります。

9 遺跡を検討する

発掘調査の報告書から古代に関わる遺跡を検出し、それがどのような特徴を持ち、古代の文献資料とどのように関わるかを考えます。

10 木簡を調査する

資料の数が限られた古代では、出土文字資料によって初めて分かる歴史も少なくありません。木簡は木に文字が書かれたものです。実物を目視・赤外線などで細かく観察します。文字の判読はもちろん、形や出土状況も考慮し、作成された事情を探ります。調査結果は詳しく記録し、編集に備えます。

11 墨書（刻書）土器を調査する

墨書（刻書）土器は、木簡と同じく遺跡から発掘される出土文字資料です。土器の外面や内面には時々文字が書かれている事があります。多くは1～2文字の断片的なものですが、出土例も多く、遺跡の性格付けをおこなう際の重要な手がかりともなります。木簡と同じく、目視・赤外線などで細かく観察します。

12 地理資料を集める

戦後に大規模な開発がおこなわれる前は、古代にその土地がどのように利用されたかを知る手がかりがたくさん残されていました。現代では失われたその手がかりを、絵図や古地図、古い地籍図や地形図、空中写真などを使って探ります。

13 地理情報をデータ化する

地理資料や発掘調査で分かった古代の土地利用について、パソコンを使ってデータを整理します。正確な情報処理をおこなった上で、誰もが一目で分かるように、色分けしたり、立体画像を用いるなど見やすさも工夫します。

14 資料編に載せる資料や写真を選ぶ

資料の収集が一通り済むと、本に載せる資料やその写真、図面などを選びます。「資料編 古代」では、出来事を古い順から並べる編年方式を採用する予定ですが、まとめて載せる方が理解がしやすい資料などは、その都度工夫します。

20 目録を訂正する（6に戻る…）

校正の際に、原稿の基礎となった目録などに誤りが発見される事もあります。市史編さんで積み重ねられたデータや収集された資料は、編さん終了後も市の財産として誰もが活用できるように、随時、補足・訂正や整理に努めます。

21 最後の確認をする

最後の校正では、これまでおこなった訂正が正確に反映されているか、念入りに確認をおこないます。これが終わると、ようやく本の印刷が始まります。

写真提供
老司式軒丸瓦・軒平瓦／福岡市博物館
下月隈C遺跡出土木簡・井相田C遺跡出土須恵器／福岡市埋蔵文化財センター

福岡市史への歩み 4

昭和初期、庶務に追われながら、福岡市の歴史のために奔走した人がいる。幾多の困難と闘いながら、文化の必要性を訴え続けた。市史に歴史有り。博物館顧問が贈る「福岡市史」史。

前回は、昭和八年度の編さん室業務として、福岡市公報への原稿執筆、史料調査、郷土史家ほか文化人との応接、文化祭事や起工・竣工式などへの福岡市からの祝辞・式辞の起草などが目立つ業務であると挙げておきました。

編さん室業務は日誌からだけでは具体的には判りませんが、上記の様子からすると、当時の編さん室は文化的な香りがする、市役所内では珍しい存在だったのではないかと想像されます。職員数は全部でも三百人余くらいだったので、生活に密着した部署がほとんどで、特別な事があればすぐに編さん室に依頼が舞い込むという具合だったようです。前回記しました薬王密寺東光院の一連の保存運動は、行政が絡んだ宗教施策の感があるかと思いますが、実は編さん室が対応するしかない、そんな問題だったようにも考えられます。

東光院は寺伝では大同元(八〇六)年に最澄(伝教大師)によって創建され、中途一時禅宗に変わりましたが、江戸時代には二代藩主黒田忠之の庇護を受けて、真言宗寺院として活況を呈したといわれます。本尊は藤原時代の作である薬師如来立像と、尊像を護る十二神将です。明治維新に伴う神仏分離策で、博多区の住吉神社から薬師如来坐像と十二神将がもたらされ、東光院は一挙に藤原仏の殿堂となりました。大正年間までには仏像二五躯が、「国宝」に指定されています。しかしながら本寺は藩主の祈願寺であったため、明治になって藩の経済的支援がなくなると、急速に経営が悪化していきました。そこで市内では、質と量とにおいて類例のない仏像群の保存を訴えて、当時の文化財関係の人々がさまざまな支援を求めて運動を起こしたのです。市史編さん事業とは直接関係はありませんが、文化財保護の観点からは、福岡市関係者としては編さん室が最右翼にいたということになりましょう。なお、保存運動は軌道に乗り、国庫補助事業として収蔵庫が建設されています。

編さん室の市政への対応が順調であったためか、市長から特に「祝辞が好評である」との言葉があり、感激した永島は直接市長に要請した増員の実現に自信を持ったようです。再三にわたって庶務課長と折衝をしています。当時六百七十万円余の市の年間予算の内、編さん室は、二千五百円の経費を得ていましたが、十二月初めには次年度の予算要求書を提出しました。

翌年一月に予算査定があり、縦横の説明をした模様ですが、「下情上達せず」と担当官の無理解を憤っています。三月六日の内示は、印刷費五百円を削減するという内容でした。永島は驚き、直ちに費用内容を明記して、復活要求を庶務課長に懇請しました。翌七日削減理由が伝えられ、その五百円は在郷軍人の補助金増加に充当するというものでした。

あまりのことに気落ちしていましたが、三月十五日には印刷費削減を各方面に了解を求ていることからすると、何か印刷の話が内々進んでいたのかと思われます。一方増員の件では、三月二十九日に回答があり、「他の振り合いもあり」ということで婉曲に拒否されました。ここに昭和八年度の諸要求は予算が削減されるという結果になったのです。

（福岡市博物館顧問・田坂大藏）

歴史万華鏡③

山笠にみる近世の博多

近世・江戸時代の博多祇園山笠は、戦国時代の戦火から、豊臣秀吉の町割によって復興した博多に住む、商人や職人の繁栄と自治を象徴する祭礼となりました。

祭礼では、博多の町々の行政と自治の組織である流が単位とされ、太閤町割以来の七流が、順番で山笠を担当して六本の山を造り、残る一流は櫛田神社へ奉納する能の当番に廻りました。近世中頃には都市の発展によって流が一〇にも増えますが、新しい流れはもともとある七流の加勢に廻りました。

流の中でも当番の町が山造りを担当し、ほかは山舁に廻ります。また、小さな町や新しい町は、流れの中での歴史や実績を積まないと、単独で山笠を造る事が許されない場合もありました。

当時の山は高さ約一五メートル、当番町は財力をかけ、山造りの職人や大工、人形師の協力で造られました。旧暦六月十五日、追山には一番山から街路を練り歩きましたが、なんといっても山を舁くのは若者たちで、前を行く山を抜いたの何のと、大喧嘩になることがありました。山笠は、博多の町々の自治の歴史とエネルギーに、強く関わっていたのです。

博多祇園山笠巡行図屏風
（福岡市博物館蔵）より

ひとやすみ？頭の体操？？ クロスワード

難度　★★★☆☆

福岡市の歴史や史跡・名勝にちなんだ問題です。 〈解答は8ページ〉
キーワードは、他のページにも隠れていますよ。
色の違うところを組み合わせると、
ある言葉になります。
ヒント「いつの時代も、国外を見据えています」

八景図鐔
（福岡市博物館蔵）

【縦のカギ】

1 儒教の始祖です。金印を保護したとされる亀井南冥も儒学者でした。能古博物館にこの人の廟があります。
2 名将・黒田如水の息子で、福岡藩初代の藩主です。福岡城を築きました。
3 浜辺に打ち寄せる波のことです。万葉集に、家恋しい気持を能古の「これ」と比べた歌があります。
　韓亭　能許の〇〇〇〇　立たぬ日は　あれども家に　恋ひぬ日はなし　（巻15-3670番）
4 青緑色の釉が美しい焼き物で、表紙の碗は中国から輸入された貴重品です。この碗を真上から見たところが8ページ下段にあります。美しい花文様をしています。
5 〇〇〇〇道路は、昭和23年に開催された〇〇〇〇の第３回大会のために拡幅され、大会名がそのまま愛称となりました。「けやき通り」としても知られています。
9 今から約千百年前、放生会の場所として最適である筥崎の「ここ」を聖地とし、全てを神木としました。
11 中世博多の貿易商で、姓は「〇〇」名は「国明」。私財を投じて博多区の承天寺を建立しました。
12 古くは「案」と呼び、博多区の雀居遺跡からは、弥生時代に木で作られた「これ」が見つかりました。英語では、desk 。

【横のカギ】

1 天然ガラス。黒く耀くことからこの名が付きました。先史時代、この石で生活必需品が作られます。どこでも採れる石ではないのですが、いろいろな形に加工されたものが広範囲にわたって見つかります。福岡市博物館 常設展示へGo!
5 古代の迎賓館「〇〇〇館」。この時代も、福岡は対外交流の重要な位置にいます。詳しくは8ページへGo!
6 「横7」の拝殿に、嵐を起こそうと風神を誘う〇〇神の姿があります。
　風神の応えは「あかちょこべー(あっかんべー)」でした。よっ!博多っ子の味方!
7 博多の総鎮守。お〇〇〇さんとして親しまれている神社です。
8 東区多々良川河口付近にある中世から近世初期の城、〇〇〇城。小早川隆景によって本格的に築城されました。立花氏の出城だったと伝えられています。
10 崩れないようで、実はたびたび崩れます。江戸時代、この修復をするためには、幕府の許可が必要でした。
12 「鐔」と書きます。刀の柄に取り付けられ、近世には装飾性豊かなものも多く見られます。「〇〇競り合い」。
13 7月になると博多っ子が「これ」を舁いて街を駆け抜けます。舁き〇〇と、飾り〇〇に分けられるようになったのは、明治に入って電線が邪魔になったからだとか。江戸時代のことは、歴史万華鏡へGo!
14 〇〇〇を変えると眠れないという人も…。「横5」からは、陶器で作られた「これ」の破片が見つかっています。舞鶴公園にある「横5」の展示館へGo!
15 早良区藤崎の猿田彦神社では初庚申の日(平成19年は１月26日)に大祭を行います。庚申は「かのえ〇〇」とも読みます。15の答えはもう出ているぞ!

■	1	2		3	4	キ
5			■	6		■
7			■	8		9
	■		■	ミ	■	ツ
10	11			■	12	
■	13		■	14		
■	■	15	ル	■		■

部会だより

調査　進捗　情報　校訂　筆耕　編集

考古

福岡市は、九州の玄関口・国際都市として有名ですが、振り返ると、大陸との交流は先史に始まり古代を経て、中世に一段と花開きます。

聖福寺、櫛田神社などがある博多浜や、北側の息浜で発掘調査が行われると（博多遺跡群）、当時の交易品が大量に出土します。中国製の陶磁器に加えて、ひときわ目をひくのが「お金」です。

中世の日本では、「寛永通宝（江戸時代）」のようなお金が造られていなかったため、主に中国銭が流通していました。博多遺跡群から見つかるお金は備蓄銭（溜められたお金）を除くと、全九州の約半数を占め、その種類は分かっているだけでも九〇種類を数えます。

中でも「大型銭」は、大きさもさることながら、全国出土数の三割以上が博多遺跡群であるという、数においてもまた特徴的です。

考古部会では、そういったお金の流通にも着目し、調査を進めています。中世の人々は、お金をどのように使っていたのでしょうか。

平成二十二年度刊行予定の『資料編考古3』では、博多遺跡群で見つかった中世銭のデータを整理し、そこから分かる中世の一幕をお届けします。

博多遺跡群出土の宋銭（等倍）

（福岡市埋蔵文化財センター蔵）
福岡市教育委員会 2005『博多105』より

古代

筑前・筑後にかかわる古文書の調査を進めています。古代文書は中世以降のものに比べて現存する数が圧倒的に少なく、大変貴重です。特に九州で見る事ができる機会は少ないのですが、今回、保安元（一一二〇）年に写された観世音寺文書二点（弘仁十一（八二一）年三月四日・斉衡二（八五五）年七月十一日の大宰府牒案）を、九州国立博物館において見せていただきました。

観世音寺は、天智天皇が母である斉明天皇を追善するために建立を発願したという寺院で（『続日本紀』和銅二（七〇九）年二月二日条より）、現在も古代と同じ場所（福岡県太宰府市）に法灯を伝えています。古代においては府大寺とも称され、大宰府と密接に関係しながら、古代の九州に大きな影響力を持っていました。その所領は福岡市域にも置かれました。

古代文書の調査

今回調査した文書は、写しとはいえ古代に写されたもので、もとの文書はすでに失われているため、文書の内容もこれでしか知る事ができません。また写された経緯も、観世音寺が東大寺の末寺になった際に、保管していた文書をまとめて書き写し東大寺に送ったという特殊なもので、この経緯自体が歴史的に貴重な事実です。

今回の調査では、写真では確認しにくい紙の状態・墨の濃淡・虫喰いの痕など、細部にわたって観察する事で、作成や伝来の過程にかかわるさまざまな手がかりを得る事ができました。

このように古代専門部会では、できる限り原本の調査を進めながら編集を進めていきたいと考えています。

中世

『資料編　中世1』の平成二十一年度刊行に向けて、史料調査と編集作業を並行して進めています。これまで五〇の文書群について調査を終了しました（五月末現在）。

先だって、福岡市総合図書館に寄託されている「明法寺榊文書」の調査を行いました。福岡市指定文化財となっているこの文書は、現在の早良区四箇の付近を拠点として活動していた榊氏に関する文書です。鎌倉期から戦国期の中世文書が伝来しており、南北朝期の少弐氏関係文書や室町・戦国期の大内氏関係文書といった、筑前国における上級権力とのかかわりを示す史料がある一方で、早良郡の新原・西山・曽賀部・警固・榊の五ヵ村で形成された戦国期の惣結合の様相を表す文書を含んでいる、北部九州では数少ない史料群です。現在では系図・屋敷図とともに五巻の巻子に仕立てられており、図書館で厳重に保管されています。

その他、同図書館の所蔵・寄託文書、福岡市博物館所蔵・寄託文書などについても調査・撮影が進んでおり、資料編原稿の作成のための校訂作業も始まっています。

中世文書の調査

近世

平成二十二年度刊行予定の『資料編　近世1』、同二十五年度刊行予定の『資料編　近世2』に収録する史料について調査を行っています。

平成十八年度後半から、九州大学附属図書館付設記録資料館(九州文化史資料部門)所蔵の三奈木黒田家文書をデジタルカメラで撮影しています。

三奈木黒田家は、黒田氏の筑前入国後下座郡(甘木市)に一万二千石を与えられ、三奈木村に別邸を構えました。以降、幕末まで一万石以上を保ち、大老として特別の待遇を受けた家です。

三奈木黒田家の文書は、総数約五千点。内容は主として三奈木黒田家関係の文書、福岡藩政関係の文書からなります。福岡藩政関係のものとしては、藩主関係、藩政関係、法令関係、財政関係、幕府より命じられていた長崎警備関係のものなど多岐にわたります。

福岡藩の記録の大部分が第二次大戦中に焼失しているなか、福岡藩政を明らかにする上で重要な史料となります。

史料の点数が多いため、撮影は十八年度に引き続き、十九年度も継続して行っています。また、すでにマイクロフィルム化されている史料についてもフィルムを複製する形で収集します。

様々な調査・収集によって集められた史料は膨大な数になります。紙幅の関係上、そのすべてが資料編に収録される訳ではありませんが、収録されなかった史料は無駄になるのではなく、通史編や特別編のなかで活かされていくのです。

近世文書の調査

近現代

春日市にある陸上自衛隊福岡駐屯地所蔵資料の検討を行っています。

それは、近現代部会が参画している『特別編　福岡城』の編集に際して、近代の福岡城と旧陸軍の関係が深いからです。すなわち福岡城趾は明治十九(一八八六)年に歩兵第二四連隊の駐屯地となり、昭和二十(一九四五)年まで存続しました。近代の福岡城で特に旧軍関係の資料については所在が知られていないものが多く、旧軍関係の資料の一部は自衛隊に預けられていることも多いのです。

訪問先の陸上自衛隊駐屯地の資料館では、連隊駐屯地の模型をはじめとして、大正時代の写真帳など貴重な資料を調査させていただき、その一部をマイクロフィルムに撮影しました。これらの資料を活用することで、福岡城の近代を描けるのではないかと考えています。

資料館内には連隊駐屯地の模型があります。当時の建物の位置関係を復元していると考えられます。なお復元のために使用した資料は不明です。

写真帳を閲覧しています。大正当時の城内の様子をうかがわせる写真が多く掲載されています。

民俗

平成二十一年度刊行予定の『特別編　現代絵巻・福岡(仮称)』に向けて、引き続き聞き取り調査を実施しています。平成十九年の三月および四月に開催された部会では、南区大橋・博多区古門戸町・中央区高砂・博多区吉塚ほかの聞き取り調査について報告がありました。対象は小売店の経営者からデパート関係者までさまざまで、報告内容は調査の中で伺った、ものの売り方・お客との関わり方・博多における人との付き合い方など、福岡市の人々の暮らしを知る上で、示唆に富んだものでした。

民俗専門部会では、聞き取り調査の中から飛び出してくるこのような「〇〇の仕方」に着目しています。福岡市において人々が知らず知らず(または意識的に)身につけている振舞い方というものを見つめることで、わたしたちが「福岡・博多らしい」と漠然と感じているものは何なのかを描き出そうとする試みです。

十九年度は上記特別編の構成を細部まで詰め、駆け足で調査・撮影を行う予定です。民俗編の構成も再検討しながら、よりよい、かつ新しい「民俗」の描き方を追求していきます。

おしらせ

刊行名が『新修 福岡市史』に決定しました。

市史編さん室の**ホームページ**が開設されました。

福岡市史編さんに関する情報や、本誌『市史だより Fukuoka』のバックナンバー、福岡の歴史コラムなどをお届けします。
福岡市史ホームページへのアクセスは、
福岡市役所ホームページ
(http://www.city.fukuoka.jp)
暮らし／スポーツ・文化・生涯学習／文化
の欄を参照してください。

ホームページトップの画像

筑紫 那津官家 鴻臚館

～対外交流の要はこの地にあった～

福岡市域は、古代より対外交流において重要な役割を果たしてきました。福岡市史でも対外交流を重要なテーマの一つに掲げて、資料の収集を進めています。

福岡市域を含む北部九州は、古くは筑紫と呼ばれていました（筑前・筑後に分割されるのは七世紀末のことです）。『日本書紀』宣化天皇元年五月条は、このような筑紫の位置付けを次のように端的に述べています。

筑紫国は遠近の国々が来朝する所、往復の関門である。

この記事によれば、筑紫の那津の口に官家がつくられ、賓客をもてなすために諸国の屯倉（各地に設置されたヤマト政権の直轄施設）から穀が集められたと言われます。いわゆる「那津官家」です。現在では、福岡市博多区の比恵遺跡がこれに関係する遺跡として注目されています。確かに外交使節や海外から移住してくる人々は筑紫を窓口にすることが多く、ヤマト政権にとっても、大陸との交流において筑紫の存在は不可欠でした。八世紀に律令制に基づいた中央集権国家が成立すると、これらの役割は大宰府とその管轄下にあった鴻臚館（当初は筑紫館と呼んでいました）によって担われました。今年は鴻臚館跡発掘二〇周年にあたり、今も日々新しい発見が続いています。

今回の市史講演会では三人の講師をお迎えし、筑紫が古代の対外交流において果たした役割を明らかにしていただきます。熊谷公男先生は『日本の歴史3 大王から天皇へ』（講談社）を出版され、四世紀から七世紀にかけての王権について深い見識をお持ちです。大王から天皇に至るこの時期、王権と対外関係は密接にかかわっており、熊谷先生が筑紫と朝鮮半島とのかかわりをどのように描かれるのか、大変楽しみです。重松敏彦先生は大宰府研究を積極的に進められ、長年の成果を『大宰府古代史年表』（吉川弘文館）として今年刊行されました。鴻臚館が大宰府の管轄下にあった事は知られていますが、その具体的な姿はまだ明らかではありません。重松先生の広範な大宰府研究の中に鴻臚館はどのように位置付けられるのでしょうか。大庭康時先生は福岡市教育委員会で鴻臚館跡や博多遺跡群など、対外交流に関係の深い遺跡の発掘に長年かかわってこられました。今回は映像資料をふんだんに用いながら、鴻臚館跡の最新の発掘成果についてご説明いただきます。

文献資料や発掘調査の最新成果を駆使し、国際都市福岡の新たな歴史が描かれる事が期待されます。

写真協力／鴻臚館跡展示館（文化財整備課）

第3回 福岡市史講演会のご案内

「古代の対外交流と福岡 ―筑紫・那津官家・鴻臚館―」

講師　熊谷公男氏　東北学院大学教授
　　福岡市史古代専門部会専門委員
　　大庭康時氏　福岡市教育委員会
　　重松敏彦氏　太宰府市市史資料室
　　福岡市史古代専門部会副部会長

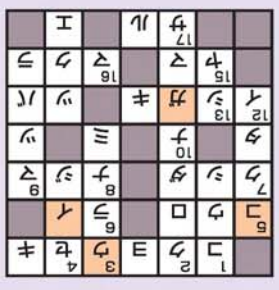
日時　平成19年8月25日(土) 午後2時
場所　福岡市博物館 1階講堂
　　入場無料・先着230名(事前申し込みは不要です)

今秋開催！
鴻臚館跡発掘20周年記念特別展
「古代の博多―鴻臚館とその時代―」
平成19年9月14日(金)～10月28日(日)
福岡市博物館 2階特別展示室

越州窯系青磁花文碗

市史だより Fukuoka第5号　平成19年6月30日発行
編集・発行／福岡市博物館市史編さん室
〒814-0001　福岡市早良区百道浜3-1-1
Tel 092(845)5245　Fax 092(845)5019

クロスワード解答



「金印」が大陸からもたらされた弥生時代、福岡の人々は、大国の傘下に入ることで、安定した世情と新しい技術を望みました。古代では交易や留学、使節の往来など、多様な外交を展開します。特に「鴻臚館」の発掘成果は、古代の福岡のみならず、当時の日本外交の一幕を雄弁に語っています。中世、一層交易が盛んになりますが、蒙古襲来に際しては、鎌倉幕府による交渉が決裂してしまい、博多湾沿岸は大きな被害を受けることとなりました。近世に入り、江戸幕府は外交窓口を絞りますが、長崎に近いこともあり、福岡の人々は外国事情に敏感だったようです。近代になると、外交の舞台は地球規模に展開し、アジア・世界の中の福岡が意識されるようになりました。そして激動の時代を経た現在、福岡は、国際交流によって友好関係を築いているのです。

九州北端部という土地柄、外交の窓口として発展してきた福岡。その歴史は、海の向こうを見据えた視線と対応の歴史でもあります。